

【学校評価資料】										山手小学校
学校経営目標	具体的計画	令和3年度の達成基準	自己評価（中間）			自己評価（最終）			学校関係者評価	
			達成状況	評価	改善策	達成状況	評価	改善策	自己評価の適切さ	
一 （心豊かな児童の育成）	①総社っ子応援プロジェクト等を通して、自己有用感を育成し、学校へ来るのが楽しいと思える児童を育成する。	「1学校が楽しい」という回答が92％以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	児童：92％ 保護者：94％ 教職員：100％	A	引き続き児童理解に努めていく。	児童：91％ 保護者：94％ 教職員：100％	B	児童それぞれの感じ方があり、不安や不満の原因も多様である。教師のイメージと本人の内面との差がある児童もいる。児童アンケートやセサの結果を個別に確認し、気になる児童について見守りや声掛けを継続的に行っていくたい。	基準は概ね達成されており一定の成果があったとして自己評価は妥当である。今後も児童の様子を個別に対応、確認し、見守りや声掛けをするといった教師からのフォローは続けてほしい。「学校が楽しい」「楽しい／楽しくない」の内実が何かを把握することで、「楽しくない」と回答している児童へのケアができるのではないかと、「楽しい」と感じていない児童の個別相談に応じる体制を整え、児童の「楽しい」が100％になるよう目指してほしい。教師のイメージと児童の内面との差だけでなく、教職員との人間関係はどうであるのか、気になる児童については家庭での様子を知り、教職員と保護者が一丸となって考える体制を構築してほしい。	
	②道徳教育等を通して、思いやりのある児童の育成を図る。（心優しい子供）	「相手を思いやった言動がみられる」という回答が92％以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	児童：94％ 保護者：89％ 教職員：95％	B	学校や学年の取り組みを学校便りや学年通信で保護者に向けて発信していく。	児童：96％ 保護者：92％ 教職員：92％	A	日々の道徳の授業や人権週間の取り組み等での児童の振り返りや様子から児童の姿容を見取り、その成果や課題について確認していきたい。	道徳教育や人権週間の取り組みなど、「思いやりの心」については、学校生活を通して児童に育まれていることから自己評価は妥当である。保護者の評価が上がったこととして、学校の取組を理解しているからではないか。児童の意識が高いことも評価できる。「思いやり」は、本人と相手の目線では異なる捉え方があり、学校と家庭が連携して教えることも考えてほしい。「思いやり」を持つことは、児童にとっては安全で安心な学校生活を送る基礎となるので非常に重要な内容である。	
	③アンケート調査や教育相談を定期的に、いじめや問題行動等の早期発見、早期対応を目指す。	「友達に嫌なことを言われたり、嫌なことをされたりしていない」という回答が82％以上である。（児童アンケート） 「学校はいじめの対策等、人権に配慮した対応をしている」という回答が82％以上である。（保護者アンケート）	児童：76％ 保護者：76％	C	学年によって臨時教育相談を行い、児童理解に努めるとともに早期対応を図っていく。全学級で言葉遣いの見直しを図る学級活動を行い、気持ちよく学校生活を送ることができるようにする。 ・人間関係のトラブルは児童が納得して前向きになれるよう時間や場を設けて対応し、保護者にも丁寧に連絡していく。	児童：73％ 保護者：81％	C	「言動や受け取り方に個人差が大きく、個別対応への比重が増える傾向がある。安心して過ごすことができる学級づくりのために、2学期に一言電話し、について話し合った内容を振り返り確認しながら、学級全体で共通した認識を高めるようにしていく。また、教育相談のやり方や回数をも再考し、児童の現状に即した安心感をもてる対応にしていきたいとにも、今後も問題行動の早期発見と対応に努める。	アンケート調査や教育相談を定期的におこなっていることから、自己評価は妥当である。一方で、定期的な相談だけでなく、普段から些細なことでも、話せる環境をこれまで以上に作ってほしい。また、場合によっては、教員だけでなく専門家等に相談対応できる機会をさらに設けてもいいのではないだろうか。保護者の理解は得られつつあると思うが、保護者は児童を通した情報によるところが多く、学校での取組みを正しく読み取れていない部分もあるので、教職員から保護者への発信を今後も引き続き行ってほしい。	
	④「す（通んで挨拶）き（きちんと整頓）だ（黙って考えて掃除）」山手小学校「運動」を通して、礼儀正しい児童を育成する。（礼儀正しい子供）	「挨拶や返事がよくできる」、「服物をもそろえる」という回答が86％以上である。（児童・保護者・教職員アンケート） 「自分（児童）が挨拶や返事がよくできる」、「服物をもそろえる」という回答が86％以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	挨拶 児童：86％ 保護者：71％ 教職員：97％ 服物揃え 児童：87％ 保護者：63％ 教職員：97％	挨拶 B 服物 B	「1学期末に取り組んだ！家庭と学校での挨拶・履き物揃え」のがはんりカードを継続すること、家庭と連携して児童の意識向上を図るとともに、保護者にも結果を確認してもらい啓発していく。	挨拶 児童：84％ 保護者：69％ 教職員：76％ 履物揃え 児童：85％ 保護者：47％ 教職員：94％	挨拶 C 履物 B	「登下校や家庭地域での挨拶ができていないことで、児童と保護者との距離に大きな差が生まれていると思われる。コロナ禍でも挨拶の意を班長に伝えたり、地区ごとに話をしたりすることで、意識の浸透を図りたい。また、その後週目標に合わせて、登校班で集合する時の挨拶や、教室に入る時の挨拶など具体的な場で様子を振り返られるようにしていく。 ・挨拶と同様に校内と家庭地域での履き物揃えの差が評価に表れている。全校で履き物揃え頭張りカードに加え、各学級で週末など定期的な取り組みとして、家庭・地域での履き物揃えを課題として出し、児童の意識を高めるとともに、さらなる家庭での協力を促していきたい。	「すきだ山手小学校」については、あいさつ、返事、服物、掃除等、生活習慣や人間関係に関する重要な事項が盛り込まれており、児童・教職員の回答では概ね基準が達成されていることから、自己評価は妥当である。一方で、あいさつについて、全体的に達成状況が下がっていることから、その原因を検証するとともに、原点にかえてあいさつの意義・方法を考え、基本にあいさつがあることを共有認識する必要があるのではないだろうか。学年差によるところもあるが、高学年が低学年の模範となる意識（縦割り班）を意図して、意識することが重要である。家庭・地域・学校で同様のあいさつができるように、大人が児童に対してあいさつを率先して行うことを今後も続けていく必要がある。掃除や履物については、「学校でも家でも」という意識の醸成を行うとともに、保護者の達成基準を変更することも検討してよいのではないかと。	
二 （学ばながら育つ児童の育成）	⑤授業改善を図り、基礎学力の定着と、筋道立てて表現できる力の育成を目指していく。	「授業で学んだことがよく分かる」という回答が80％以上である。（児童アンケート） 「お子さんは、学校での学習内容を理解している」という回答が80％以上である。（保護者アンケート） 「1めあて」「振り返り」を意識した授業を行った」という回答が90％以上である。（教職員アンケート） 「国語科・算数科の単元テストにおいて、正答率が80％以上である」という回答が85％以上である。（教職員アンケート） 「自分の考えを、順番を考えて（筋道立てて）話したり書いたりできるようにできている」という回答が80％以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	児童：88％ 保護者：81％ 教職員：95％ 児童：88％ 保護者：71％ 教職員：80％	A B	「1時間の活動の流れを提示し、児童が見通しをもって授業に取り組むことができるようにする。引き続き、めあての改善にも取り組む。 ・2学期に、相互授業参観の機会を設け、教師間で指導方法のヒントを得て、自分の指導に生かしていく。 ・進捗の工夫を教師間で共有し、児童の理解が深まっていくようにする。 ・発達段階に合わせて、校内で統一したノートの書き方指導を行う。ノートチェックを行い、書き方の定着を図っていく。 ・新聞記事を読んで感想を書く、条件作文等に取り組み、書く力を伸ばす。	児童：89％ 保護者：85％ 教職員：100％ 児童：84％ 保護者：75％ 教職員：85％	A B	「夏休みに研修を行い、1時間の流れを提示する取組を共通理解し、2学期から取り組んできた。流れを掲示することで児童は見通しをもつて活動に取り組むことができるようになってきている。 ・11月に相互授業参観の週を設けた。普段の授業の様子を互いに見合うことで、指導方法のヒントを得ることができ、有意義な時間となった。 ・ノートの書き方は、山手小のノートの書き方を基に各学年の発達段階に合わせて指導をしている。3学期は、学年が上がったことを踏まえて、ノートをクラス間で見合うなどして次の学年がスムーズに始まるようにつなげていきたい。 ・書く力を伸ばすために、書く経験を積むことが大切だと考える。学数制限で書く、日記、新聞記事を読む、条件作文等、継続して取り組んでいきたい。	基礎学力の定着と児童が実現する力は向上しているの而自己評価は妥当である。基礎学力の向上が図られていることは教職員の努力の賜物である。今後も個々の児童のニーズを意図して、児童理解に基づいた授業計画・実践・改善を行ってほしい。発達段階や児童の状況に合わせた授業の工夫も今まで以上に積極的に行う時期にきている。「読解力」や「求められていることを理解することは、国語ではもちろんのこと、今後の勉強全体に必要な力である。「書く」ことについては、手をしっかりと動かす、実際に書くだけでなく、口頭で話し、また、児童の自己責任感を高め、非認知能力向上に向けたかわりも引き続きおこなってほしい。	
	⑥ICTやユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを意識する。	「1わたしは、学校で進んでパソコンを使って学んでいる」という回答が90％以上である。（児童アンケート） 「視覚的支援、感覚を使った活動・半具体物の活用等ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組んだ」という回答が95％以上である。（教職員アンケート） 「1一人一台のパソコンを使って、児童の学んでいく姿勢を育てている」という回答が90％以上である。（教職員アンケート）	児童：86％ 教職員：97％ 教職員：79％	B	「夏休みに行ったICT活用の校内研修を参考に、パソコンの活用を促す。 ・2学期（継続的）3学期（ペース走）には、全校で楽間運動に取り組む。外でしっかりと体を動かせるようにする。 ・目標の一つの例として、岡山県チャレンジランキングへの参加を呼びかけたい。	児童：85％ 教職員：100％ 教職員：82％	B	「学習内容を考え、日々一人一台端末を学習に活用してきた。使うにつれて児童もスキルアップしてきている。どんな場面でも使ったかを学年で情報交換しながら、同じ学年は同じ活用ができるように配慮しながら進めていきたい。	1人1台端末を用いた授業を模索し、効果的な授業を実施していること、自己評価は妥当である。日々の授業を積み重ねる中で、ICTを用いた授業展開を工夫してほしい。また、「進んでパソコンを使っている児童」も一方で、リモート授業の前提となるパソコンの操作面でもつまづきをもった児童に対して、的確な指導を行ってほしい。視覚的にユニバーサルデザインを取り入れた授業については今後も工夫をしながら導入して欲しい。その際、確認した経過を評価することは、児童の自信につながる。自己肯定感を高めることとなる。「苦手意識のある子ども」に対して、引き続き個別対応を実施してほしい。	
	⑦家庭学習の定着と、個々の児童の発達段階に応じた工夫をしていく。	「1家庭学習に（10×学年＋10）分以上に取り組んでいる。」という回答が80％以上である。（児童・保護者・教職員アンケート） 「お子さんは、家庭学習をきちんとしている。（きらめきEASTの家庭学習の基準10分×学年＋10分以上）」という回答が80％以上である。（保護者アンケート）	児童：80％ 教職員：86％ 保護者：68％	B	「9月号の学年通信で本校の学習時間の捉え方について児童と保護者に周知し、学習方法を知らせていく。 ・夏休みに自主学習ノートの書き方について全体で研修を行い、児童へも書き方についてのプリントを配付し、取組の改善につなげていく。 ・自主勉強の促進し方のプリントを配付し、取組の改善につなげていく。 ・学校や宿題で書く課題に取り組む、家庭学習の工夫をする。	児童：75％ 教職員：96％ 保護者：66％	B	「学年によっては、自主学習の内容の一覧表やピンズを配付して内容の工夫ができるよう支援している。余ったプリント等も活用してもよいことを呼び掛けていきたい。 ・メディアコントロール週間に合わせ、学習時間の捉え方を児童や保護者に引き続き呼び掛けていきたい。	家庭学習の取組については児童が行えていると認識しており、自己評価は妥当である。家庭学習に自主勉強ノートを課すことで、児童の興味・やる気を引き出している。自主勉強ノートは、ノートを写す・埋めるだけでなく、質の向上に見合った内容を行ってほしい。教職員と児童・保護者によって達成状況の認識の差があるので、その差の持つ意味を検討してほしい。家庭の事情によっては難しい側面もあるかもしれないが、今後も児童の学びの意欲を高める取組を継続してほしい。	
三 （元気づけ、安全、健康、安全、教育の充実）	⑧たくさん運動に取り組む。また、目標をもって運動に取り組める活動を積極的にやっていく。	「1体育の学習でたくさん運動している」、「業間休みに外に出て体を動かしている」という回答が85％以上である。（児童アンケート） 「先生は、密に気を付けながら児童が目標を持って運動に取り組むことができるよう工夫を行った。」という回答が80％以上である。（教職員アンケート）	体育 児童：93％ 業間 児童：84％ 教職員：94％	A	「今の取組を継続し、引き続き目標をもって運動に取り組めるようにしていく。 ・2学期（継続的）3学期（ペース走）には、全校で業間運動に取り組む。外でしっかりと体を動かせるようにする。 ・目標の一つの例として、岡山県チャレンジランキングへの参加を呼びかけたい。	体育 児童：94％ 業間 児童：88％ 教職員：96％	A	「感染症の状況を見ながら、児童への声かけを行った。職員間で共通理解を図ったこともよかったと思われる。現状の取組を継続していきたい。	コロナによる制約で体育等の教育活動に制限があるにも関わらず、工夫をこらし、児童の運動量を確保していること、自己評価は妥当である。教職員間で共通理解し、意図的に取り組めるよう、体育の時間の運動量が担任によって差があること等の運動力の2極化は、児童の身体成長にも関わってくるので、運動の積極的な意識付けは今後も継続して行ってほしい。また、コロナ化によって、運動が今まで通りできない場合もあるため、「体の動かし方」等の技術的な指導を行ってほしい。	
	⑨減メディアに向けて、メディアコントロール週間を中心に、家庭と連携し、望ましい基本的生活習慣の定着を図る取組を行う。	「1メディアコントロール週間では、家族と決めた自分のめあてをしっかりと、家庭と連携し、望ましい基本的生活習慣の定着を図る取組を行う。 ・メディアコントロール週間に、メディア利用のめあてを一緒に考えたり、声を掛けたりしている。」という回答が80％以上である。（保護者アンケート） 「担任の先生は、メディアコントロール週間に、メディア利用や睡眠時間について話題にし、児童がめあてを守れるように声掛けしたりしている。」という回答が95％以上である。（教職員アンケート）	児童：89％ 保護者：75％ 教職員：97％	B	「1学期末に行った「スマホ・ネットとのつきあい方チェックシート」の結果を保護者にお知らせし、家庭での取組に生かしてもらえるようにする。 ・9月の学校保健委員会にてICTサポーターによる「ペラレントコントロール」について講話を行う。参加できない保護者にはたよりで啓発する。 ・保健委員会児童で「使っていないメディア」「控えるメディア」を考え、ミニ保健指導を利用して全校児童に知らせる。さらに保護者にも知らせ、家庭で考えてもらえるようにする。	児童：88％ 保護者：78％ 教職員：100％	B	「保健委員会のミニ保健指導等を通して、「使っていないメディア」「控えないメディア」を考えることができ、児童は意識しながら減メディアに取り組むことができたと思われる。しかし、メディアコントロールは家庭での取組であり、家庭との連携は欠かせない。保護者への啓発を継続して行っていく。 ・感染症対策のため、学校保健委員会今年度は行うことができなかった。講演会の内容を保健だよりでとりあげたが、実際に話を聞く方が効果的だと感じる。	基本的な生活習慣の定着に向けた取り組みが実施されているので、自己評価は妥当である。基本的な生活習慣の定着には、家庭との連携が不可欠である。メディアコントロールは、家庭間でも差が大きいことから、目標設定などにならないことにより、保護者の意識改善が必要である。コロナによりメディアの利用は増加しているため、メディアの良い点や悪い点をしっかりと児童に理解させ、例えば、児童がSNS被害に陥らないような指導を行う必要もあり、保護者に対しては、学級懇談会の話題にする、専門講師による講演会を実施する等、SNSの危険性について周知してほしい。	
四 （地域と連携した学校づくり）	⑩学校行事の様子や児童の姿、子育てに役立つ情報を発信し、本校の教育活動を多くの人に知らせる。	「1学校のホームページや学校便り、学年便り等の情報は役に立つ情報」を発信し、本校の教育活動を多くの人に知らせる。 ・教職員、連絡網、電話連絡、学年便り、ホームページ等の各種通信により、保護者との連絡を密に取ったり、役立つ情報を発信したりできた。（教職員アンケート90％以上）	保護者：91％ 教職員：90％	B	「2学期も引き続き、ホームページの更新、学校便り「かけはし」、学年便り等を通じて、児童の学校での様子が伝わるように発信していく。 ・各種通信方法により、教師は家庭と学校との連絡を密に、家庭と学校のつながりをより深く強くしていくようにする。	保護者：91％ 教職員：92％	B	「学校便りや学年便り、保健便りなど、お便りでの発信は積極的に行ってきた。しかし、ホームページの一部に更新できない項目があり、今後、ホームページの運営について、サトの意見しを行った。更新の役割分担を明確にして、組織的に取り組んでいっていただく必要がある。	各種通信やホームページでの発信は安定的に行っていることから自己評価は妥当である。「お知らせ」によって学校の様子が保護者に伝わり、学校への信頼関係を構築できている。校長だよりは読みやすく、山手小の様々な通信に対しては保護者は満足している。一方で、ホームページでの情報公開は便利よう取り扱いが難しいので、児童の個人情報等のリスク管理をしっかりと意識してほしい。また、情報は常に新しいことが大切であるので、定期的な更新をお願いしたい。	
	⑪学校・家庭・地域で連携して、ボランティアによる学習支援の機会を工夫し、交流を深める。（総社を愛する子供）	「1学習効果や地域交流を意図して、学校支援ボランティアの有効な活用」に努めた。（教職員アンケート80％以上） ・地域ボランティアの方が、学校へ来て学習を支援してくださることは、児童のために役立つと思う（学習面、人との接し方等）（保護者アンケート90％以上） 「ボランティアの方と一緒に学習することができた楽しいと思う（児童アンケート90％以上）」	教職員：79％ 保護者：93％ 児童：93％	B	「学習におけるボランティアの活用がスムーズに行えるように、ボランティア登録名簿を再確認した。コーディネーターと協力しながらコロナ対応を意識した活用方法を探っていく。 ・新たなボランティアの増員も大切にしていきたい。ボランティア登録を促す声かけ機会を増やしていく。	教職員：77％ 保護者：93％ 児童：86％	B	「コロナにより学校・家庭・地域での連携がとりにくい現状がある。そんな中で、夏休みの学習支援ボランティアや2学期後半の読み聞かせボランティア、登下校の見守り等、多くの方々にお世話になった。今後も長く続いていけるように連携をとってきたい。 ・年間計画で地域や学年からのボランティア依頼を予定していたが、実施するに難しい現状があった。2学期末になり、2年生が九九を聞いたりして活動を楽しんでいる。また、2年生の町探検でもぜひ依頼したいと計画している。今後も学習支援の機会を工夫し、交流を深めて、総社を愛する心を育てていきたい。	自己評価・改善方法ともに妥当である。今年度も、コロナによってボランティアによる学校支援が少ない状況や家庭・地域との連携が今までも難しい側面があったと思うが、その時できる支援もあると思うので、学校における課題等を保護者や地域に共有してほしい。ボランティアによる学校支援は、子ども達にとって多くの学びを得ていることから、ボランティアと児童の交流については引き続き行ってほしい。また、地域ボランティアの高齢化が見受けられるので、活動できる内容を精選し、学習支援の継続も行ってほしい。加えて、悩みを抱えている児童の相談・対応を一定の配慮を前提に、地域ボランティアが行うことを模索してもよいのではないかと。加えて、学校における教育課題を的確に把握前向きに取り組んでいる教職員の姿勢は評価に値し、家庭や地域からの教職員への信頼は増している。コロナ時のように学校が困難な課題を抱えている際に、教職員の負担が少しでも減るように、学校の無理のない範囲で効率化していいのではないだろうか。	